

D. N.マクロスキーのレトリック論の検討 経済理論と言語論的問題

山本泰三

京都大学経済学研究科博士課程

本報告は、マクロスキー（D. N. McCloskey）のレトリック論（McCloskey, 1985; 1996 など）を検討するものであるが、この作業によって、経済理論と言語論的問題の関係を考察するための手がかりをささやかながらも得ることができればと考えている。マクロスキーの議論は方法論的問題の考察のための有力な視点を提供し、探究されるべき諸問題を示唆した。しかし方法論的問題に対するマクロスキー自身の取り組みは、決して十分なものではなかったように思われる。マクロスキーの問題提起が多様な反応を惹起したことからそれは窺える。本報告では、マクロスキーの主張とそれに関する様々な議論を整理し、レトリック論の意義を評価することを試みる。その際に、マクロスキーの議論の力点が微妙に変化していった点に注目する。

マクロスキーは、経済学の公式の方法論を「モダニズム」として特徴付け、その方法論は実際には機能していないと主張する。マクロスキーのいうモダニズムとは、典型的には論理実証主義に代表される、科学哲学に基づいた方法論的立場をさしている。それは、科学性の基準は認識論的な基準に従うこととして確立されうるとする立場であった。しかしマクロスキーは、科学哲学の成果や文学理論を援用して、モダニズムを批判する。モダニズムは、知識、科学活動についての極めて狭い見解に基づく。もしもモダニズムの基準に科学が厳格に従わなければならないとしたら、研究をすすめることはほとんど不可能になってしまうだろう。しかし、経済学方法論の文献においてはこのモダニズムが規範として述べられてきた。

ところが、実際の経済学の研究の現場では非公式の方法が用いられているとマクロスキーはいう。それが「レトリック」である。ここでいうレトリックとは、単なる文章の飾りというよりも広い、「説得の技芸」という意味を持つ。科学とは、機械的な手続きに従った過程ではなく、様々なレトリックが用いられる人間と人間の間のコミュニケーションなのである。ここで、メタファーの重要性が主張される。例えば、「生産関数」や「弾力性」といった言葉、また数学的推論もメタフォリカルである。生産関数なるものが文字通り現実中存在すると考えるよりも、思考の手段としてその語は用いられていると理解すべきであり、またその方が有用だとマクロスキーは考える。

ここで確認しておくべき問題が二つある。まず、McCloskey(1985)は、以下の

点に注意を促している。「その主題は学問そのものであって、経済ではなく、あるいは経済学理論が経済の記述として適切かどうかということでもなく、あるいは経済におけるエコノミストの役割が主として問題なのでさえない。主題はエコノミストが仲間うちで交わす対話、しかも互いに、投資需要の利子弾力性はゼロであるとか貨幣供給は連邦準備銀行が制御するとかを説得しようとする対話である」。この但し書きは、マクロスキーの議論の射程を最も適切に表現していると考えることができる。もう一点は、マクロスキーは経済学は「うまくいっている」と考えている、ということである。これは、多くの方法論者の関心とマクロスキーの議論が齟齬を来す原因の一つとなっているように思われる。これらの点については後述する。

レトリック論が科学における言語の役割を問題の中心に据えていることは明らかであろう。すなわち、言語的なものはその固有の次元を持つのであって、たとえ科学における理論言語であろうとも、「現実」の純粋な反映ではあり得ない。とりわけレトリック論において特徴的なのは、説得という側面を重視している点である。これは Austin(1975)の語法に従えば、発言の、事実確認的性格とは区別される行為遂行的な性格に焦点を当てていると言えるだろう。多くの方法論的議論が理論と現実の対応関係をめぐって展開していることを鑑みれば、この点は高く評価されて良いと思われる。

マクロスキーの主張は、様々な論者によって議論されることとなった。まず、当然予想されることとして、レトリック論の相対主義的な性格に対する批判があるだろう。実際、多くの論者の主張の背景には、「正しい」レトリックと「偽り」のレトリックはどうやって区別できるのか、という疑念が見え隠れしている。しかし、これは「レトリック」という概念にそもそも含まれている問題である。Reboul (1990)によれば、レトリックとは弁論の技術であるが、それはまた弁論に関する技術の教育、さらには弁論に関する理論でもあった。レトリックを用いるということは、単に主張をもっともらしくするための小手先のテクニックに頼るということではなく、レトリックが適切なものであるかどうかを吟味し評価することでもある。そのことによって、不適切な推論を見つけだすことができるだろう。ゆえに、マクロスキーは単純に相対主義を主張したのではなく、開かれたコミュニケーションによって科学性が達成され则认为しているとみなされるべきである。これは、マクロスキー自身が述べているように、ハーバーマスの議論に通ずるものであろう（この点を特に強調するものとして Boylan & O'Gorman(1995)がある）。ただし、一方でマクロスキーがレトリックの「文学的」性格を強調していることも確かである。

また、マクロスキーは社会的・制度的・歴史的な文脈に十分注意を払っていない

いという批判がある(Combs in Klammer *et al.*, 1989 など)。実際、マクロスキーがこのような問題に積極的に取り組んできたとはいいいがたい。ただし、このような問題はレトリックという概念の射程外にあるのではなく、むしろそこから必然的に導き出される。レトリックという概念は、言語の根本的な社会性を前提しているからである。マクロスキー自身は、科学者集団のコミュニティを、人文主義というヨーロッパの知的伝統に依拠してイメージしていると考えられる。ヨーロッパ的な人文主義とアメリカ的なプラグマティズムの結合として、マクロスキーの科学像は描かれている。これは多分に理想化されたイメージであろう。このイメージはやがて、現実の市場についてマクロスキーが持つヴィジョンへと繋がってゆくことになる。

しかし、レトリックという概念は両義性を孕む。レトリックが固定化してしまえば、それは規則に過ぎなくなる(Barthes, 1970)。経済学がレトリックであると宣言することは、固定化した経済学研究のあり方を正当化する論拠としても機能する。この場合、レトリック論はフリードマンの議論の最新版ということになる。

比較的多くの論者が一致して主張しているのは、マクロスキーとフリードマンの方法論の類似性である(Mäki, 1987; Gerrard, 1990; Dow, 2002)。両者の理論についての理解は、道具主義的であるという点で共通する。フリードマンは理論はその予測能力によって評価されるとして、仮定の現実性は無関係であると主張する。マクロスキーは、予測は不可能だ点でフリードマンとは反対の立場をとるが、理論はその説得性によって評価されると考えている。ここでも現実性は無関係なものとなる。

予測は不可能であるというマクロスキーの立論は、合理的期待理論のマクロスキー流のある種の応用にに基づいているという点に特徴がある。合理的期待理論を乱暴に要約するとすれば、合理的な経済主体は経済政策の効果を見越して行動するので、誘導的な経済政策には意味がない、という主張になるだろう。マクロスキーはこれを、国家に政策を助言する経済学者が市井の人々にくらべて合理性でまさっているわけではない、という意味に解する。マクロスキーは、アメリカ人的な質問、すなわち「あなたがそんなに利口ならどうしてお金持ちではないんですか？」を経済学者に差し向ける。もし予測が可能なら巨万の富を得ることができるはずだ、ということになる。

また、Mirowski などは、マクロスキーの議論における撞着を指摘している(Mirowski in Klammer *et al.*)。マクロスキーは、経済学者のふるまいを論じる際には、彼等をコミュニケーションを行い、狭い意味での合理性に縛られない主体として描く。一方でマクロスキーは、オーソドックスな経済理論における人間の合

理性に関する極端な仮定に異義を唱えることはないのである。ところがマクロスキーの近年の議論は、ある意味でこの矛盾を解消する方向に進んでいる。McCloskey (1996; 2001)における「ブルジョワの美德」についての議論によれば、市場におけるアクターとしてのブルジョワは、たんに効用を最大化するだけの主体ではない。ブルジョワは貴族や農民とは異なる徳目を持つ。ここでマクロスキーはスミス（特に『道徳感情論』）を援用している。とりわけ重要なのは、ブルジョワの徳、その行動の特徴は、説得のためのコミュニケーションにあるとされている点である。ブルジョワは「レトリック」を用いる主体なのである。

Mäki(1987; 1996)は、实在論の立場からレトリック論を検討している。实在論とレトリック論は方法論的な立場として対極にあるようにみえるが、Mäki はレトリック論と实在論の「結合」を提案するのである。これは実は決して突飛な主張ではない。前述したように、そもそもレトリック論は「仲間うちの対話」を分析することを意図していたのだから、实在論者のいう「存在論」的問題への関心が薄い。強いレトリック論を退けるならば、实在論とレトリック論は補完的な関係を取結ぶことができるのではないかと考えられるのである。マクロスキーは、この主張にある程度譲歩したように見える。

もちろんマクロスキーは、経済学がいかに「現実」を分析するかという点について考えていなかったわけではない。モダニズムを相対化しながらも、マクロスキーにおいて計量的手法が最も重視されていることは明白であり、その傾向はしだいに強まっているといってよい（一方で、数理的分析に対する批判は激しさを増している）。しかし当初の立脚点からすれば、数量的な知識といえども特権的ではありえないとするのが一貫した解釈だろう。この論点はレトリック論の文字どおりの臨界点であり、マクロスキーの両義性が最も現れる部分でもある。量的な基準が称揚される一方で、量の大小を判断する基準を考える際にレトリックが重要であるとも主張されている。ここでレトリックはいかなる役割を果たすのだろうか。

レトリック論に対する批判を集約するならば、マクロスキーはレトリックを過大評価している、ということになるだろう。レトリック論は経済学の科学性についての神話を打ち壊し、経済学というものを理解するために取り組むべき課題、とりわけ言語論的問題への関心を大きく牽引したと言える。しかしながらその反基礎づけ主義は、モダニズムとは別の形の基礎づけ主義を招きかねない。その結果、Mäki への対応に典型的にみられるように、「レトリック」「説得」がすべての問題に対する予め用意された答えになってしまう恐れがある（'You shouldn't want a realism if you have a rhetoric.' McCloskey, 1998）。このことは逆に、マクロスキーのアイデアをより深化させることを妨げているとも言える(Rossetti, 1986)。

レトリックへの着目は、マクロスキーの関心とは異なる方向においても可能だろう。経済学者が用いるメタファーやその他のレトリックの分析は、経済学者が意識的・無意識的に拠って立つ概念の構成へのアプローチともなる（この方向性は Klammer(1984)に近い）。すなわち、説得の「方法」とともに、説得の「内容」が問題となるのである。例えば、合理的期待理論を、その数理的定式化を抜きにして評価するわけにはいかないはずである。マクロスキーが例にあげる世界経済からのアメリカ経済の隔離の問題に関しても、マクロスキーのいう量的「基準」の設定におけるレトリックは、国民経済をどのように理解するかということ、国民経済についての概念をめぐる用いられるだろう。

これは、マクロスキーの議論にも適用できる。マクロスキーの市場についての理解は、「貴族」「農民」「ブルジョワ」「美德」といったメタファーの用いられ方から十分窺い知ることができると思われる。マクロスキーは、「プロレタリア」はもはや現代においては重要な位置を占めないと述べるが、ここで「プロレタリア」とは物的生産の従事者を示している。こうして市場経済は「ブルジョワ」を中心として理解すべきだと主張されるのだが、先の意味での「プロレタリア」以外のすべてが「ブルジョワ」であるということになるのである。

レトリックという観点から出発して概念を分析すること——それはもはやレトリック論の射程をはみだすものであろう——は、概念の行為遂行的な性格を捉えることを意味する（一つの手がかりとして、名付けという言語行為を考えることができるだろう）。概念分析のこのような方向性は、研究者のコミュニティの分析に留まらない可能性をもつと言ってよいかもしれない。

主要文献

Austin, J. L. 1975 *How to Do Things with Words*. Harvard University Press. (坂本百大

訳『言語と行為』大修館書店、1978)

Barthes, R. 1970 L'ancienne rhétorique: Aide-mémoire. *Communication*, 16. (沢崎浩平訳

『旧修辞学』みすず書房、1979)

Boylan, T. A. and O'Gorman, P. F. 1995 *Beyond Rhetoric and Realism in Economics*. Routledge.

Dow, S. 2002 *Economic Methodology: An Inquiry*. Oxford University Press.

Gerrard, B. 1990 On matters methodological in economics. *Journal of Economic Surveys*, vol 4, no. 2.

- Klamer, A. 1984 Levels of discourse in new classical economics. *History of Political Economy*, 16(2).
- Klamer, A., McCloskey, D. and Solow, R. (eds.) 1989 *The Consequences of Economic Rhetoric*. Cambridge University Press.
- 馬渡尚憲 1990 経済学のメソドロジー 日本評論社
- McCloskey, D. N. 1985 *The Rhetoric of Economics*. The University of Wisconsin Press.
(長尾史郎訳『レトリカル・エコノミクス』ハーベスト社、1992)
- McCloskey, D. N. 1994 *Knowledge and Persuasion in Economics*. Cambridge University Press.
- McCloskey, D.N. 1996 *The Vices of Economists - The Virtues of Bourgeoisie*. Amsterdam University Press. (赤羽隆夫訳『ノーベル賞経済学者の大罪』筑摩書房、2002)
- McCloskey, D.N. 2001 *Measurement and Meaning in Economics*. edited and introduced by
S. T. Ziliak. Edward Elgar.
- McCloskey, D. N. 2002 You shouldn't want a realism if you have a rhetoric. in U. Maki (ed) *Facts and Fiction in Economics*. Cambridge University Press.
- Mäki, U. 1987 How to combine rhetoric and realism in the methodology of economics. *Economics and Philosophy*, 4.
- Mäki, U. 1993 Two philosophies of the rhetoric of economics. in W. Henderson, T. Dudley-Evans, and R. Backhouse (ed), *Economics and Language*. Routledge.
- 西部忠 1996 レトリックとリアリズム 批評空間、II-10
- Reboul, O. 1990 *La Rhétorique*. PUF. (佐藤泰雄訳『レトリック』白水社、2000)
- Rossetti, J. 1996 Deconstruction, rhetoric, and economics. in N. de Marchi (ed) *Post-Popperian Methodology of Economics*. Kluwer Academic Publishers.